

佳作

絵本の癒し

入江 知子

柳田先生、こんにちは。二度目のお便りになります。

子供達を出産してから、絵本の世界を知り始めましたが、とても奥深く、うれしさ、楽しさ、怒り、悲しみなど、いろいろな感情をいつも見られる世界で、なごんでいます。

いままで、主婦として、育児を主にしていたわたしですが、今年の四月から仕事を始めました。わたしにとって、仕事という社会へは十年ぶりの復帰です。仕事に慣れるまでの一ヶ月は、バタバタしたものになりました。そんな中、洗濯物を干

したり、掃除機をかけてくれる子供達にとっても感動させられました。

仕事を始めることが決まった時、

「お母さんは、仕事を始めることにしました。

小学校から帰ってきてても居ないよ。かぎを持つことになることもあるけど、三人で声掛けていってね。」

子供達に話をしました。

仕事がある日の朝は、いつも動いているわたしの姿を見て、

「なにか、やることある？」

など、話かけてくれるようになりました。

そんな子供達の姿を見て、朝の忙しい時間ではありませんが、子供達一人一人の時間を作り、髪をあみこんであげることにしました。一人にかかる

時間は五分と短いものですが、わたしにとってはとても大切な時間となっています。

仕事を始めても、子供達との図書館通いは続いています。絵本に囲まれた空間は癒しを与えてくれました。その時、ふと目に入った絵本がありました。「おかあさんになるってどんなこと」です。

おかあさん役になったミミちゃん。子供役のモコちゃんが熱をだしました。一晩中看病して、翌朝、熱がさがったモコちゃんをミミちゃんがぎゅっただっこしました。そのシーンにわたしも思わず目に涙が浮かびました。その時、脳裏には自分の子供達が家事を手伝ってくれる姿、笑顔で学校で起きた出来事を話してくれる姿でした。幼稚園の頃はよく発熱していたけど、最近は全然発熱しなくなっただなあと思いました。子供達の成長の早さを

感じました。子供達の今を大切に過ごしていこうと、改めて心に決めました。

仕事が軌道に乗る前はよく、落ち込むこともありました。職場の先輩達には、

「だいじょうぶだよ。」

と、声を掛けてもらいました。家に帰ってくると、

子供達に、

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

主人の転勤による引越しの不安、子育てでの不安の時にわたしに勇気をくれた、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」の絵本が思い浮かびます。焦ってもどうにもなりません。一つ一つ慣れていこうと、思いました。この、「だいじょうぶ」という言葉が子供達の身の一つになっていることに、わたしは、うれしく思います。この絵本に出会っていたこと

に感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

仕事も乗り越えられそうです。

絵本とは、現在の自分を考えなおすものにわたしの中で存在しているように思います。これからも子供達とのつながり一つとして、絵本に触れていきたいと思います。わたしの癒し、なごみです。